

小栗外傳三編



^ 13
3293
15



門 へ 13
3293
15

寒燈 小栗外傳卷之十三

東都

絳山歌編

十八廿九
本大學出版部

第廿三編

斯く小栗が郎等九人の們へ日やびして熊野山に到り小栗夫婦を見奉る
よふ夫婦の喜び斜るを遙く道に速く歩むを賞し九人の們を
主君の悪務全く愈く昔にかりぬ光景に夫婦悪はれさ人泣くを以て
ちり。その付助を人々對ひても我此地方に居ることを誰か教へず其ふれと
同く池の庄司とみ出くや。我く常州より敵の光景に驚かすところ
這般くこれ事ゆゑと常阿上人に還舎し。結城坊朝の獲取討し。有枝
有系を細かくせ入ぬと小栗夫婦は今ふとぬ上人の道徳を賞する

今帝堂九人集ふ久々。能宣討の事舒へき事ありすと。多々評議とす。父小栗満平。一回鎌倉殿の勅言と。紫及びりぬ。且能宣討。評議とす。詮秀と鎌倉殿の寵信なれば。彼を討んと。私に做す。いふも。世の人。免許を蒙り。爾して詮秀討む。鎌倉殿の母弓。世の人。免許を蒙り。免す。角を。便宜を求む。お軍家の免。これより。主従。京都。出生。便宜を求む。お軍の御代。世より。高野。爾之。使も。江戸。空。月日。送り。美登。小。郎。郷。濃州。小。照。天。姫。と。守護。居。は。処。小。万。長。が。許。より。足。討。入。と。襲。す。伯父。と。とも。に。是。防。戦。は。う。ち。姫。と。伯父。の。去。向。を。失。ひ。此。亦。彼。処。捜。索。れ。ども。さら。し。知。は。し。こ。万。長。や。擲。の。ふ。と。昔。墓。中。に。被。く。窺。ふ。お。万。長。が。許。も。居。る。と。さ。と。殿。の。跡。を。慕。ひ。東。國。へ。や。下。り。ま。ら。ぬ。

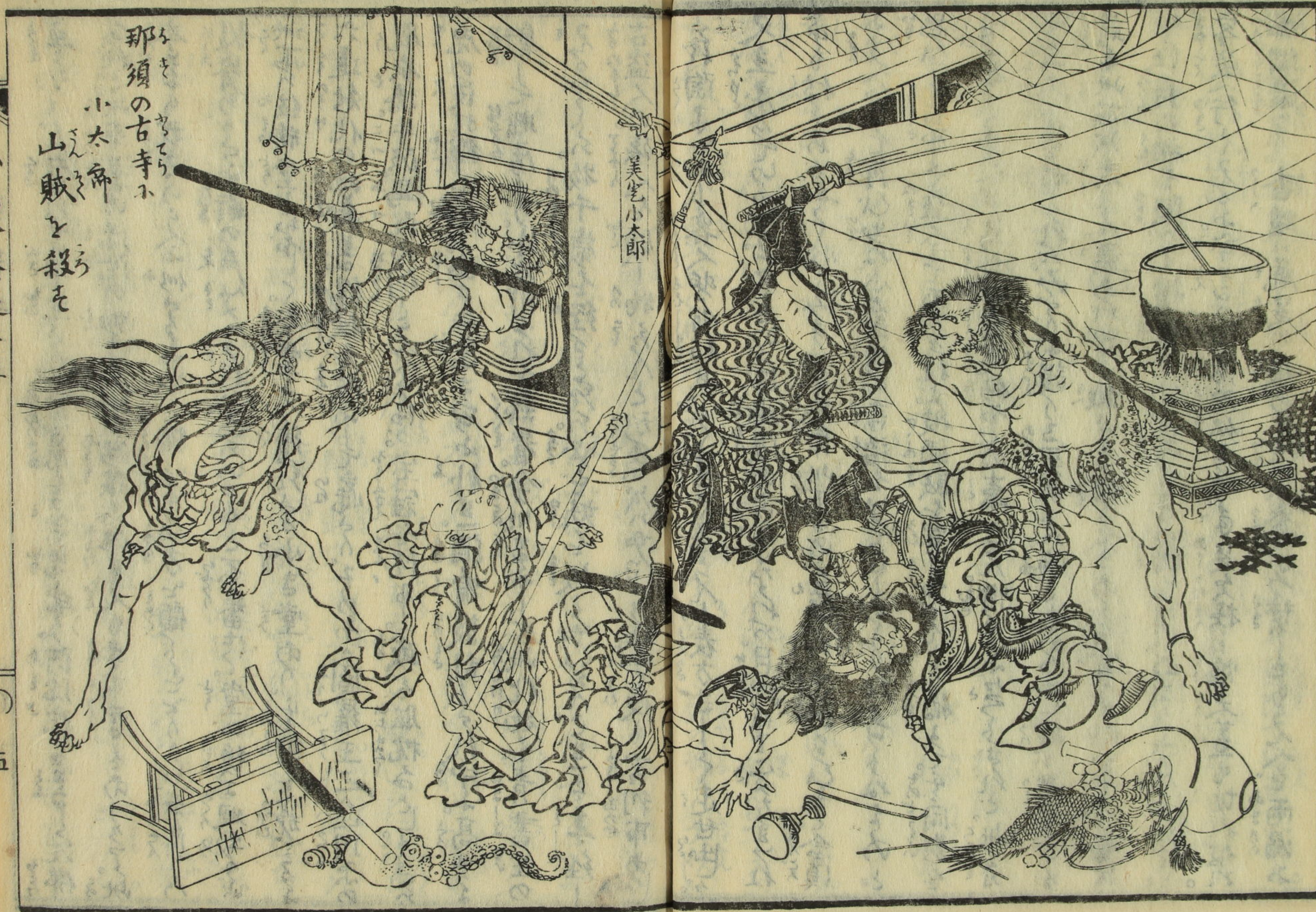
爾らこれより東國へ赴くと。鎌倉まで入り。其道さか。公を。姫君の。更。知。は。し。斯。く。常。陸。や。誠。と。ふ。と。鎌。倉。を。ま。り。往。む。行。く。下。総。國。那。須。郡。が。赤。石。着。ぬ。り。此。所。は。是。九。月。未。の。天。を。日。の。ゆ。り。短。く。那。須。郡。の。原。に。半。夜。に。や。西。に。お。も。ち。の。宿。棲。り。し。は。村。鳥。幽。林。に。て。飛。声。の。も。憐。れ。の。悲。し。く。な。く。お。は。け。も。主。君。の。こ。思。ひ。お。も。れ。ま。ら。ぬ。旅。の。夜。に。袖。露。に。お。も。れ。み。居。ら。ぬ。日。も。や。既。に。果。々。と。此。野。の。昔。近。衛。院。の。宮。女。玉。藻。と。さ。か。化。し。野。干。と。なり。此。野。に。か。く。こ。り。し。と。三。浦。上。総。の。友。介。小。勅。定。あり。て。お。も。れ。神。通。自。在。を。お。も。れ。光。狐。な。れ。ども。王。君。の。勅。命。終。に。脱。れ。は。彼。友。介。矢。先。か。て。此。郊。原。の。露。と。消。し。と。尚。も。靈。の。石。止。り。妖。出。な。せ。ん。玄。羽。利。尚。の。道。徳。も。悪。靈。終。に。去。り。し。と。今。も。この。解。映。の。と。り。

時とてくろくく怪異あり。跡よ今夜の月もて四方のあやめも并ぬ目お
 えるもの遠かき叢の裡の狐火と耳もはるるのとの声も枯井の虫れ
 音と友を呼ぶ狼の声さへも夜嵐の牙にさぐりもそわらへ尋たの
 りのなりせぬ氣も消ゆる失るまき公剛なる丈夫の忠義のなれば旅なれど
 斯くの凄き心こもせむ足もまるとして歩む暗夜の途をさ先くあな方
 ぬぞ迷ひぬれ行どもく野を歩む始勞と果るれも春く道の森の初より
 一道の火れ光閃出る。この宜れ処のあるものぞ火の光のほり人家をたれむじ
 ぞ彼もたどる行巻も用も做へき母と火れ光を目南とし茂る草踏
 つまらぬ足もはらして行むどふ。と母も火の光ある処も至るる。此もあな
 足と寂く。ありとる寺も、行曲に影墻破と荒るる人の住ともあひらぬ
 厨とももほき方お燈火のほりもさびく。何人の住やると公裡不審ど。

斯てもあなきおろく孫がまふ案内をえて入るやと門の戸をほとくと叩けど
 唯と回意して出する戸を叩く者あり。彼人紙燭をたれむその火も
 すし入るふ四十むりの法師のひらか栗のどたが。お法師夜をまますとて
 甚猛悪げなれが。大白星の必き圓の眼をこらる。小を師を寤らひて驚き
 とはわらちなる。小を此法師が光景をえてまふ此古寺の山賊の巢穴
 なりなれよ。と足も踏むまき。今さらぬ。絵とては。爾は彼
 何やどの子せん今宵とて母投宿をかり此法師がまふ。今さらぬ。爾は彼
 言語を和めてまのける。某とまき。國のりのめく。東國方よとて。ん
 とるぐと此もまてまはる。此野の道まき。歩迷ひ。今さらぬ。安みとて。り
 里の方へ出む始勞とて。母宿をせむと思ひ。遥か此の寺をこら。受
 はれ。勞と足も曳て。今さらぬ。けり。今夜の宿を。とて。へとら。

傷の最劣より物を案ずる辨ありが今の言語を以て打聴以て回意られ
 見えおびえた辺鄙の強よ荒果る古寺なれば夜食をくらへはわくどく
 飯ごはは。それぞ申厭ひあらざらば這裡に入りて宿りなまると前もさき誘引を
 小き布をさきさきして傍の殿おはひく裡へ入ると厨の方おはひくを洗し
 地爐の香を居人煙茶の食を。さて云や前もさきめくか破るの
 ことおとく一飯の時も好し。今日おとく某少く病を。村落を出て
 銚子ひらく客人ののほくちやさき銭を牛へまふ道市へ行て酒飯を
 取らるる人小太郎宜りさきさきく飢う。雨あれば房を煩らさ入ると
 畏しと躊躇を法師ゆる苦かかんちく銭をふへ人迷くせ市ふ行くとも
 酒飯を好くと催促いざらば房を煩らし中さんと腰裡より銭を出し
 ふのれ傍の銭を数へてこれおとく幾許の酒飯を好くと厨の棚より交換
 した陶子を知り。客人物付行くと買て還らんと表方さきさき走せ出
 又立戻りていさかう。とまかは幽陰の古寺なれば目別ねて安た目な
 るも付らめと。あう怪しみもさき角此雨の之居て外へ出のひそく念頃
 おとくへちきて再びおとく小太郎傍の言語を以てとめよりたさうなめと
 思ひ。お果して盗人そありを。彼酒飯を買取らんとへ偽りてを同敷を
 唱えあううへ。鳥合の盗賊ゆるの事さき憐れふとさきと。此の
 少一太事を懐たれば。みづりか謾りさ失おと悔ともかく。彼を還らさる
 前此此所走らる。雨あれば餓らる。ゆるもあさき食入りのをさき燭火
 かけ。厨の裡を隈なく搜索たれと。露をうりの物もなし。あまうりお尋う移る。
 客殿へ行く。お本さき阿弥陀仏さき。さき足欠換。幡天蓋も切れ破れ
 蜘蛛濃る。香爐の荒足の痕のさき。香らしき焚くさき。さき人へと雨漏お

傷の最劣より物を案ずる辨ありが今の言語を以て打聴以て回意られ
 見えおびえた辺鄙の強よ荒果る古寺なれば夜食をくらへはわくどく
 飯ごはは。それぞ申厭ひあらざらば這裡に入りて宿りなまると前もさき誘引を
 小き布をさきさきして傍の殿おはひく裡へ入ると厨の方おはひくを洗し
 地爐の香を居人煙茶の食を。さて云や前もさきめくか破るの
 ことおとく一飯の時も好し。今日おとく某少く病を。村落を出て
 銚子ひらく客人ののほくちやさき銭を牛へまふ道市へ行て酒飯を
 取らるる人小太郎宜りさきさきく飢う。雨あれば房を煩らさ入ると
 畏しと躊躇を法師ゆる苦かかんちく銭をふへ人迷くせ市ふ行くとも
 酒飯を好くと催促いざらば房を煩らし中さんと腰裡より銭を出し
 ふのれ傍の銭を数へてこれおとく幾許の酒飯を好くと厨の棚より交換
 した陶子を知り。客人物付行くと買て還らんと表方さきさき走せ出
 又立戻りていさかう。とまかは幽陰の古寺なれば目別ねて安た目な
 るも付らめと。あう怪しみもさき角此雨の之居て外へ出のひそく念頃
 おとくへちきて再びおとく小太郎傍の言語を以てとめよりたさうなめと
 思ひ。お果して盗人そありを。彼酒飯を買取らんとへ偽りてを同敷を
 唱えあううへ。鳥合の盗賊ゆるの事さき憐れふとさきと。此の
 少一太事を懐たれば。みづりか謾りさ失おと悔ともかく。彼を還らさる
 前此此所走らる。雨あれば餓らる。ゆるもあさき食入りのをさき燭火
 かけ。厨の裡を隈なく搜索たれと。露をうりの物もなし。あまうりお尋う移る。
 客殿へ行く。お本さき阿弥陀仏さき。さき足欠換。幡天蓋も切れ破れ
 蜘蛛濃る。香爐の荒足の痕のさき。香らしき焚くさき。さき人へと雨漏お



美宅小太郎

那須の古寺
小太郎
山賊を殺す

さあての酒肴をく飲まうとつねの身もたぐ。せめてのこふ汝もう睡をさすまはし
 藝伎くし。じてかりとも扇をんと。さてこそ銅鑼を打つるぞ。此拍子に打連く。
 躍をむどり又さし。杯と飽まで欺きまへ。地獄のこれをやまうの腹は居
 う絲錫杖を小脇に提げ。躍出彩糸の悪。老陽府母ありても。まっふん地獄
 の面も三回まで。腹をまといふ。諺のまを忠と。や汝にじりて。まて
 酒肴を益んぐ飽まで食ひ。それの銅鑼を打つ。ど我々が。ゆりのを。破きし
 今又。あまを欺ひく。流く。嘲罵さし。ける。こそ是此。この罪を作。まの慈悲を
 主と。する。我ら。そのは。免され。汝を。て。修羅道。は。流し。ま。さる
 小ぞ。悟。甘。まの。國王。も。獄卒。も。彼を。脱。も。ひ。そ。と。錫杖。を。振。ま。う。う。く
 かけ。が。國。魔。も。鬼。も。一。般。に。鉄。持。ま。ん。と。う。り。揚。て。小。を。身。目。ぐ。し。走。ま。う。り。
 小。ま。う。こ。と。は。物。も。せ。と。我。等。う。ん。背。ひ。く。劍。并。の。躍。ま。う。我。も。相。ま。い。

あり。びん。ふ。よく。躍。ま。う。と。云。は。く。も。腰。の。佩。刀。抜。放。ら。地。獄。が。打。こ。い。錫。杖。は。
 只。一。刀。切。落。し。其。ま。う。踏。こ。み。大。袈。裟。を。ま。う。ま。ま。と。斬。り。ま。う。り。早。を
 又。う。う。う。國。魔。も。鬼。も。脱。衣。妹。も。か。ま。い。と。逃。走。り。ま。う。脱。は。じ。と。或。は。梨。子
 割。車。切。又。撲。切。ま。う。は。も。あり。一。盞。茶。付。は。残。り。斬。殺。し。ま。う。ま。の。表。の。方
 を。望。ま。う。ふ。松。明。ま。う。と。大。勢。の。這。行。を。ま。う。と。ま。う。ま。ま。の。れ。ど。あ。ま。く
 前。知。り。出。行。し。主。の。僧。に。同。行。を。傳。へ。還。り。ま。う。う。ん。足。を。殺。し。此。寺。の
 盜。賊。の。根。を。断。り。ま。う。と。ま。う。ま。う。と。ま。う。り。又。想。ひ。く。と。ま。う。行。志。は。我。等
 へ。容。易。な。ま。う。ま。う。大。る。の。ま。う。り。形。ま。う。ま。う。か。た。は。ひ。ま。う。ま。う。の。あ。ま。う。ま。う。
 い。づ。の。ま。う。り。忠。義。を。せん。今。殺。し。ま。う。者。ま。う。の。酒。狂。の。上。に。戲。こ。ま。う。り。
 時。運。ふ。ま。う。ひ。ま。う。を。傷。ゆ。ま。う。あ。れ。幸。ひ。と。い。ひ。ま。う。り。脱。走。ま。う。り。如。は。し。と。
 慌。忙。く。行。本。を。背。負。ひ。裏。の。方。より。脱。れ。出。ま。う。ま。う。は。ら。して。ま。う。ま。う。と。既。ふ

えての勞も出さず歩むも懶いふ。願すおぼして休胡くも。さてこそ
 爰をおどろけしけれ一夜の宿をねとぬらさる。公なくも畏れは足る。
 那はゆらまほし。誓附て身休らひし。まひらんやと侮れなく。頼まひへる。
 女へ裡よりさし。歌き。小を弁がさる。臥寝ひえ。かて戸を推開。はれ。結を
 解らふ。いと傷やく。いむと。這裡へ入らじ。まへといはば。小を弁。び。程。入
 壚邊。手腰らち。かたわら。女と茶を汲。これ。飲。秋の夜風のま。く。あは。火
 ぬらじ。中さんと。柴折。く。焚。は。火。影。ま。さ。し。小を弁。が。牙。か。く。火
 す。し。うち。え。る。袖。や。裾。の。朱。の。血。も。流。て。あ。り。じ。は。咳。然。と。し。く。驚。る。ま。る。
 俄。に。ま。て。物。陰。ふ。少女。を。招。き。さ。く。や。と。小。を。弁。に。弁。り。これ。は。あ。は。我。衣。の。血。も
 を。ん。ゆ。何。る。人。と。怪。て。戒。嚴。さ。る。あ。ん。ど。ん。と。斯。な。れ。う。人。か。ら。ん。
 彼。亦。が。牙。も。あ。や。と。わ。れ。同。期。あ。て。え。ん。の。と。女。ら。う。う。ら。對。ひ。お。と。等。の

我衣の血も流し不審て驚きまふとおぼゆ。あはれ少くも縁故
 あり。その跡を語り。はるん我まこと。二人。て。此。故。是。家。に。居。る。み。ふ
 と。あ。く。怪。し。い。ま。へ。は。ま。ま。と。語。り。ま。へ。は。為。悪。う。な。ま。は。し。と。い。ふ。女。と。か。は
 又。合。し。急。角。の。回。應。う。う。り。が。誓。附。あ。り。て。年。増。女。小。女。ら。ち。對。ひ。お。ん。え
 何とも。おぼし。を。中。ら。ん。此。旅。人。と。今。を。ん。お。達。す。と。い。ひ。後。中。又。人。を。傷。害。し。人。と
 え。て。衣。類。血。も。流。し。せ。ん。志。守。の。ゆ。と。さ。く。れ。ぞ。いと。恐。怖。く。ら。お。り。人。と。も。
 其。骨。柄。を。窺。ふ。尋。常。さ。る。ぬ。豪。傑。と。え。も。ま。は。は。る。や。我。上。の。憂。難。許。を
 云。々。へ。と。顧。み。の。む。行。う。ら。鯨。よ。う。磯。虎。小。女。誘。引。ゆ。と。そ。も。彼。の。い。ふ
 可。及。ま。ん。恥。う。も。成。受。ん。よ。り。遙。き。場。ら。と。お。も。は。ゆ。れ。が。牙。の。所。由。を。語。ら。ん。
 い。の。め。り。や。と。云。々。ゆ。れ。小。女。の。喜。ぶ。色。も。あ。く。命。ま。さ。く。小。爾。の。と。く。物。結
 の。色。は。し。と。い。ふ。女。小。女。ら。ち。對。ひ。は。く。云。出。た。れ。我。が。牙。の。う。人。を。包。ま。さ。て

小野卷廿三



郊原に
奸人
殺す
て
金
草
原
の
間

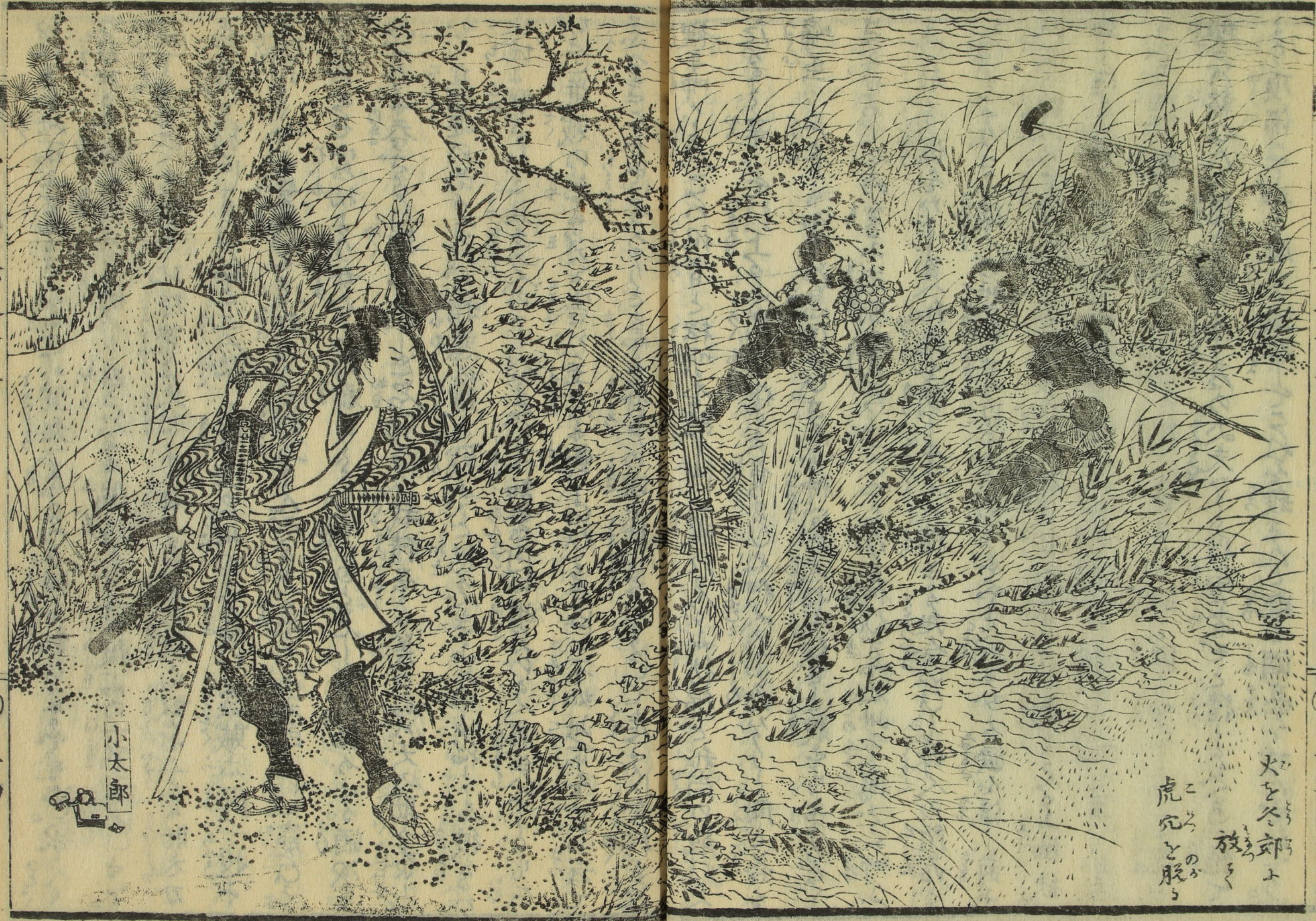
小太郎

中いほご小艱苦を故ひまられよ奴亦も小女も素の都近きものせをぶら
 去りし此地方をさるる村山賊の爲に棄れられ此西に擄まのるなり
 及くの賊は姪殿とて幾許の苦も惜しむ斯むるに取らぬ
 此又ハ生存命存命久きあはれも難面りの心も今死さる易
 されど故郷の祝儀今一回遠く苦艱を告げへるも角も倣ふと
 一日くことぬる其隙を伺ひて脱と出んと公配とて賊も是を惜し
 其守厳めして去らば万夫ふ尚の勇者あつて誘引出さぬ逃まがし
 足下の中を窺ふ人を害し人ども教ふかまらぬ光景の世に比ひたり
 勇者とて也あれ我く二人が身故のせり人となへられ小を弁首尾らも
 笑へはるごふあれはささる悲しくあらんされども斯る離さば只
 二人して居るなれば脱と出んと難くもさふなると速に走らぬ女ら
 又て云愚うのくと宜ふりのう形暗夜もあれが此山の四方へんさふまはま
 あり各よあふ鳥川と印幡沼と狭まれば只西方のを陸に漕たりそ
 古寺ありて賊多く會へる其寺を過らざれば化よ出がしこよりて賊の護
 ありとせりせり小を弁云我を其寺に宿り這般くのことあり其のち
 途ゆりて又如此くの半ゆりと古寺ありて途津ゆりて傍を殺せる
 細中か語りなれば二女の女を愕ゆと驚きまるとむるこ小を弁不中
 悪傍を殺せしとせり驚く護しきよ傍は由緒の人なりや又ハ賊の同類
 此二つの内まふが我の則ち敵なり女らも其能を報へるとありん
 まよつて勝負せよ運を天任せしと急ぐまふ女頭はた右
 らちあり否と爾るものるし今もせへまふと賊も仇をあれい
 彼亦がたれ死んや奴家二人驚きし古寺の傍を容易討ふと宜ふ

中いほご小艱苦を故ひまられよ奴亦も小女も素の都近きものせをぶら
 去りし此地方をさるる村山賊の爲に棄れられ此西に擄まのるなり
 及くの賊は姪殿とて幾許の苦も惜しむ斯むるに取らぬ
 此又ハ生存命存命久きあはれも難面りの心も今死さる易
 されど故郷の祝儀今一回遠く苦艱を告げへるも角も倣ふと
 一日くことぬる其隙を伺ひて脱と出んと公配とて賊も是を惜し
 其守厳めして去らば万夫ふ尚の勇者あつて誘引出さぬ逃まがし
 足下の中を窺ふ人を害し人ども教ふかまらぬ光景の世に比ひたり
 勇者とて也あれ我く二人が身故のせり人となへられ小を弁首尾らも
 笑へはるごふあれはささる悲しくあらんされども斯る離さば只
 二人して居るなれば脱と出んと難くもさふなると速に走らぬ女ら
 又て云愚うのくと宜ふりのう形暗夜もあれが此山の四方へんさふまはま
 あり各よあふ鳥川と印幡沼と狭まれば只西方のを陸に漕たりそ
 古寺ありて賊多く會へる其寺を過らざれば化よ出がしこよりて賊の護
 ありとせりせり小を弁云我を其寺に宿り這般くのことあり其のち
 途ゆりて又如此くの半ゆりと古寺ありて途津ゆりて傍を殺せる
 細中か語りなれば二女の女を愕ゆと驚きまるとむるこ小を弁不中
 悪傍を殺せしとせり驚く護しきよ傍は由緒の人なりや又ハ賊の同類
 此二つの内まふが我の則ち敵なり女らも其能を報へるとありん
 まよつて勝負せよ運を天任せしと急ぐまふ女頭はた右
 らちあり否と爾るものるし今もせへまふと賊も仇をあれい
 彼亦がたれ死んや奴家二人驚きし古寺の傍を容易討ふと宜ふ

傍の血まみれに息も絶くふるりて居るを女をくつろいり何人の如く
 做しぬと人々も同ふかき荷ひま一人のうち年長な漢子なり今夜
 旅人の寺よまゆりて宿をとらふ和尚をさむさるふいと猛じした丈夫なれ
 よき印りのとあり人も小勢あつた敵對かじと旅人をあきまき寺ま踏
 和尚自ら我れをほひ集りて還すまはるふ旅人の人へを隈を捜すふ
 豫て妖物は打打くる地蔵の六箇魔の大衆牛乳の丑馬の字た。三途の
 境まで殺されしをさてる旅人の所なるめいふ猛き人なりとも安内
 志ふぬりのあれがさめてまはる逃すまはる追付く仇討せん我れを西乃
 方を尋ねる。此方へけ家と隈なれいふ足止め人の必定あれは又あど
 こと失えたりやと和尚自ら尋ねる。我れ西の方十町なるも追付く
 遂は人影もいなくなる。此方のふれまはる。走居りしある途め古井の
 裡呻く声。この何者と松明を照しは。歌えたる。彷彿と和尚の貌見え
 たる。辛くも門上る。斯重傷を負ひぬ何人の由なるなりと問と答と
 啼虫の声音もあやれ息はひささう仲間の大おをむぎと殺さる。年子のく
 させめておみまふ。末期のまはる。はからんと荷ひまはる。此重傷なる叶ふ
 まし。怨念保をかり。多人和尚を斬し。まの精なる。処今いひ。旅人の所なる
 おもえたり。さる。旅人の此家へまひし。さる。あやと。同。女。涙を流し。前ふ
 此。入。旅。人の。事。じ。お。さ。ふ。し。の。ゆ。ぐ。欺。ま。ま。を。ま。は。し。熟。く。る。ふ。袖。袂
 血。の。ま。み。れ。あり。故。の。曲。者。と。思。ふ。ら。尚。編。り。ま。ま。と。公。を。は。し。牙。の
 う。を。同。ふ。鈍。く。て。寺。の。と。和尚。を。斬。し。ま。も。詳。な。語。り。ま。へ。や。ま。あ。ら
 雙。足。靱。ひ。んと。想。へ。と。彼。の。尋。ね。る。の。大。夫。か。く。ね。勇。者。ぞ。と。精。を。ま。ま。の。語。り
 より。頂。備。中。も。麻。木。酒。吞。て。これ。を。殺。さんと。既。酒。宴。を。せん。と。い。ふ。

傍の血まみれに息も絶くふるりて居るを女をくつろいり何人の如く
 做しぬと人々も同ふかき荷ひま一人のうち年長な漢子なり今夜
 旅人の寺よまゆりて宿をとらふ和尚をさむさるふいと猛じした丈夫なれ
 よき印りのとあり人も小勢あつた敵對かじと旅人をあきまき寺ま踏
 和尚自ら我れをほひ集りて還すまはるふ旅人の人へを隈を捜すふ
 豫て妖物は打打くる地蔵の六箇魔の大衆牛乳の丑馬の字た。三途の
 境まで殺されしをさてる旅人の所なるめいふ猛き人なりとも安内
 志ふぬりのあれがさめてまはる逃すまはる追付く仇討せん我れを西乃
 方を尋ねる。此方へけ家と隈なれいふ足止め人の必定あれは又あど
 こと失えたりやと和尚自ら尋ねる。我れ西の方十町なるも追付く
 遂は人影もいなくなる。此方のふれまはる。走居りしある途め古井の
 裡呻く声。この何者と松明を照しは。歌えたる。彷彿と和尚の貌見え
 たる。辛くも門上る。斯重傷を負ひぬ何人の由なるなりと問と答と
 啼虫の声音もあやれ息はひささう仲間の大おをむぎと殺さる。年子のく
 させめておみまふ。末期のまはる。はからんと荷ひまはる。此重傷なる叶ふ
 まし。怨念保をかり。多人和尚を斬し。まの精なる。処今いひ。旅人の所なる
 おもえたり。さる。旅人の此家へまひし。さる。あやと。同。女。涙を流し。前ふ
 此。入。旅。人の。事。じ。お。さ。ふ。し。の。ゆ。ぐ。欺。ま。ま。を。ま。は。し。熟。く。る。ふ。袖。袂
 血。の。ま。み。れ。あり。故。の。曲。者。と。思。ふ。ら。尚。編。り。ま。ま。と。公。を。は。し。牙。の
 う。を。同。ふ。鈍。く。て。寺。の。と。和尚。を。斬。し。ま。も。詳。な。語。り。ま。へ。や。ま。あ。ら
 雙。足。靱。ひ。んと。想。へ。と。彼。の。尋。ね。る。の。大。夫。か。く。ね。勇。者。ぞ。と。精。を。ま。ま。の。語。り
 より。頂。備。中。も。麻。木。酒。吞。て。これ。を。殺。さんと。既。酒。宴。を。せん。と。い。ふ。



小太郎

火を冬ふゆ郊の下
放はなす
虎こ穴のとの脱がす

西ノノ

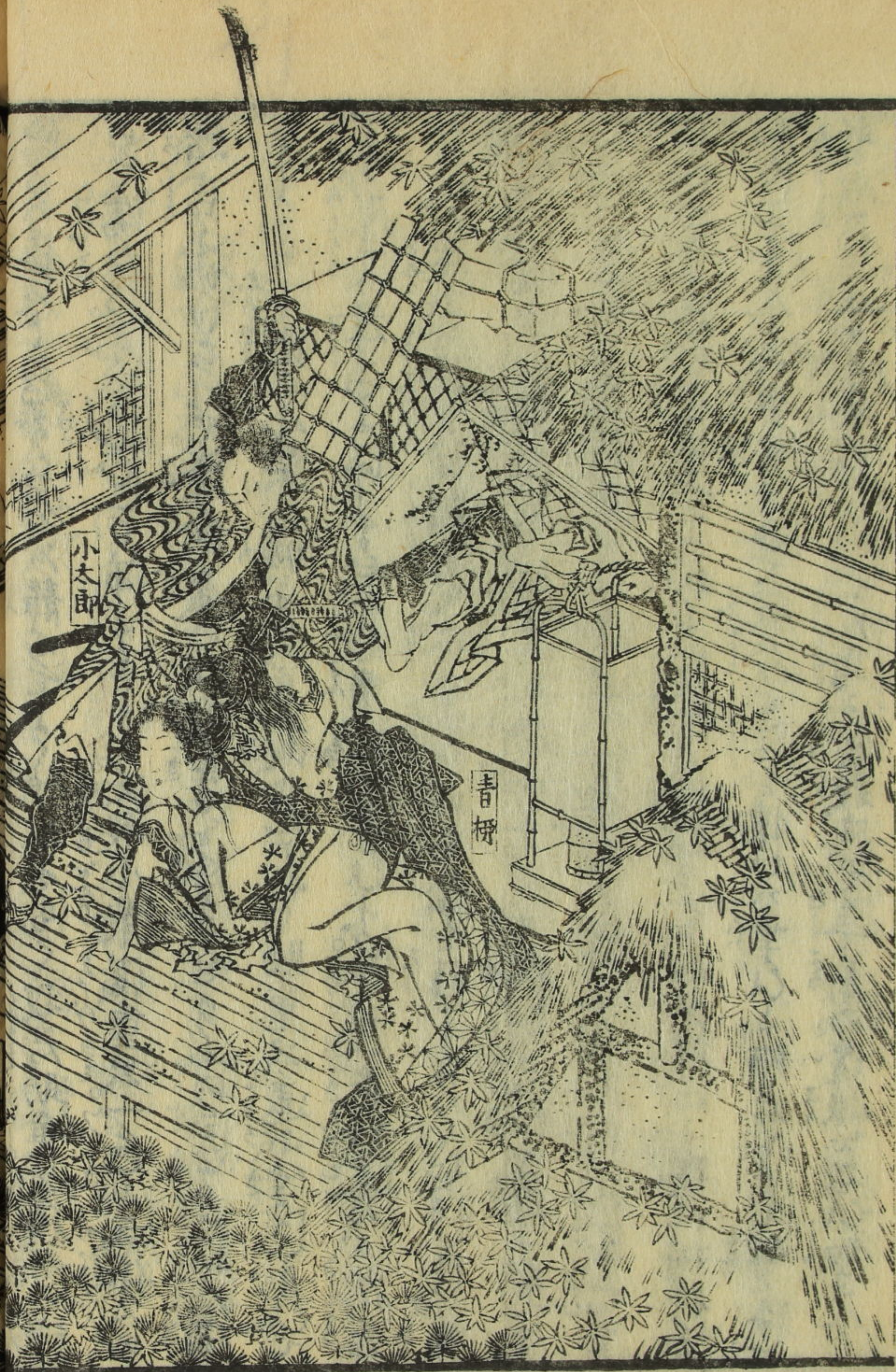
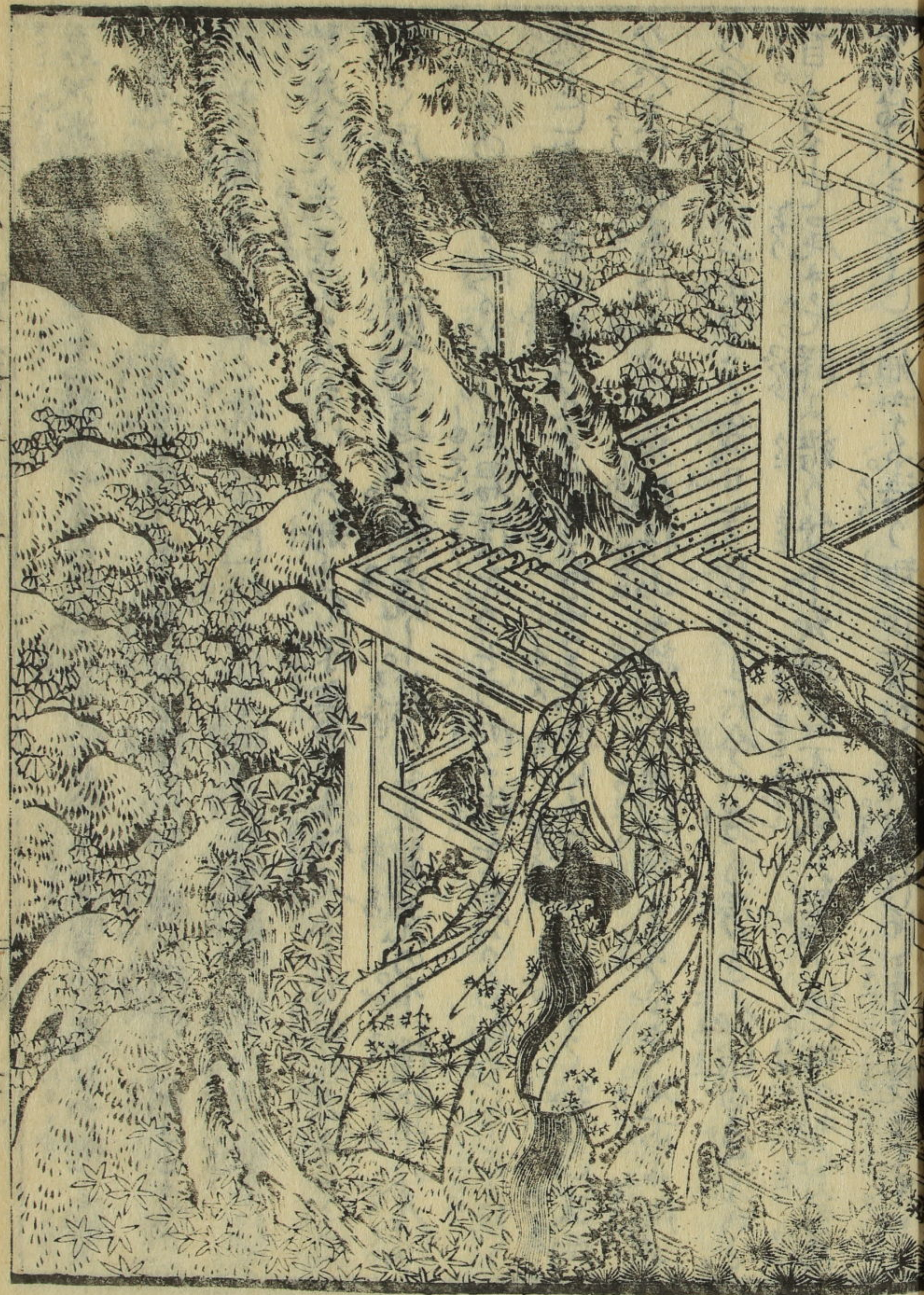
十四

とも知らずばして小太師の引還して事なりが。只今賊が松明をらちりのすまを
 遙よえるふ折々。風が松明の火を吹散くじ枯残る枝や為り中燃付を熟くと
 へくくちあやう。此野の末と帯のどく。川よりあつち。一叢より。今此賊を彼より
 へ。援より枯草より火をかきんぎるののねふ。前より水より。逃し出入き
 処なり。幸い今夜西風なれば。後の舟火の烈くして終る。焼く失ぬば。しや
 命の助るとも。牙痛焼れ捨ざし。然るとれあの方かくて。此より人を討せん。
 これ窟竟の縁ぞと。獨生ひ生茂る叢の初より。牙次潜め賊のする。火付下
 賊へ形とも知れず。ばして旅客のうも。猛りとも。不知案内ののめ。なれば。逃さるる
 よもあはじ。袋の裡れりのよりも。尚ほやばし。と勇みは。競る。此正火を
 行ふ。行く。彼帯の。これ。至る。小を。舟。付。か。を。火。ひ。く。叢。の。中。を。立
 出。腰。刀。を。り。て。枯。草。を。早。は。筋。より。盗。賊。の。と。れ。跡。の。道。を。積。り。て。腰。の
 燈。を。さ。り。し。や。う。て。火。を。後。へ。折。ら。ぬ。折。ら。ぬ。夜。嵐。の。いと。を。げ。り。て。積
 る。枯。草。は。燃。き。し。我。の。方。へ。靡。き。し。う。賊。を。入。は。よ。り。も。お。の。ひ。も
 か。け。ぬ。て。お。ね。ね。只。愕。然。る。る。を。う。り。あ。て。消。人。とも。せ。ぎ。と。呆。れ。る。う。火。勢
 盛。ん。あ。な。り。草。木。も。し。り。と。一。般。に。空。く。と。して。焼。く。ゆ。く。驚。行。く。盜。賊。は。松。木。や
 衣。類。よ。火。後。り。喚。き。叫。び。く。死。さ。る。も。あ。り。或。煙。よ。な。を。失。ひ。川。へ。捨。つ。く
 死。さ。る。も。あ。り。水。火。の。責。小。ま。り。の。猛。悪。を。賊。の。強。次。本。敵。を。そ。と。亡。び。さ。り
 足。年。来。の。積。悪。を。皇。天。振。怒。し。の。ひ。て。ま。と。小。を。舟。よ。借。り。此。所。に。亡。び
 り。あ。つ。ち。ま。と。小。太。師。の。死。地。に。入。り。脱。を。難。う。し。お。不。思。議。の。謀。を。の。り。け
 出。し。其。才。思。さ。れ。の。み。あ。ら。じ。賊。を。殺。し。ま。さ。と。智。勇。の。し。と。ま。ぬ。と。さ。り。入
 忠。臣。の。誠。を。天。も。憐。れ。冥。助。を。た。ま。さ。る。あ。つ。る。人。し。積。善。の。家。が。あ。ら。じ。旅。歴。の
 積。悪。の。家。が。あ。ら。じ。餘。殃。の。り。と。足。等。の。の。り。と。云。へ。ま。つ。も。斯。て。小。太。師。と。この

小太師の巻 七十三

七十五

道行も斯云我の小栗家の昵近の信の其一人美登小太師為久より。
 と父て女又敬馬父の嘯也及ぶ名武の山家水の右屋小免電及と父へ
 多れその子息とてほしきとてう。いふも美登小四師が世将とてあるをじ汝
 が父の道分がさるる果とて我知れり。ことごとく後云知せん。さるるまらおれたら
 姫君の山家の上ぞ氣争ひし。おとく今今の断めら懸世へ赴たうとあるが。
 其後のるの知けりや青柳をたぢよふり。せむ去向の知れざれば。いふ
 もも捜索中とてく斯いふも身も瘦。憂さ入場いぞや。は何ゆゑぞ父の
 為。その父祝の身は果と知る。あんと宣ひとふ。さしくはす。多ひやと云ふも
 おろく涙る。小太師のまじとらちなて幾回う嘆息。凡娼婦の心根と
 浮まらるるをせまふはよ生つ実物をあくる。執する情さよ。我お結ると
 ばあふ。さこそ嘆ん不使やと。極き丈夫も孝心と感する。涙は眼をまらる
 結る。長た。つら。公が静めてよく。笑杯。そもく我君助重公。幾母の泣
 めて濡衣の身を忍びては。ゆきとらち大殿小栗。後重公。一色と云。佞人の
 譖言。ふかけられて。鎌倉。後重公の心。あまき。を受させらる。のこな。て。おん傷
 まく。も下総の小栗の城。小失。ふ。此は。今。助重公。通。ふ。は。じ。り。て
 より。原。孝。子。は。ほ。や。せ。ん。悲。嘆。ふ。沈。む。ひ。か。此。る。一。色。詮。未。か。所。為
 なる。速。小。彼。佞。人。が。討。て。後。重。公。の。心。を。合。を。晴。し。め。り。く。お。ぼ。し。は。我
 們。を。引。候。て。鎌。倉。は。して。行。ふ。相。持。路。や。て。不。圖。照。天。姫。女。遭。う。る。を。て。
 此。姫。君。の。機。て。より。親。殿。も。ち。の。許。せ。許。嫁。の。う。ら。う。ら。名。武。の。山。家。亡。て
 后。何。處。に。忍。び。居。る。か。と。も。知。ら。ず。一。が。思。ひ。ま。や。叔。父。横。山。は。懸。れ。相。持。不
 お。じ。ま。ま。ん。と。安。秀。方。う。ひ。て。我。君。も。怨。を。懐。け。幸。ひ。と。姫。君。を。り。て。甜。と。は。
 勢。附。足。を。止。め。五。鬼。押。とい。ふ。荒。馬。は。食。殺。は。して。年。暮。の。遠。恨。を。さ。ひ。知。さ。ん。と。



小栗卷之四

小太郎

青柳

易多れど年若れ女を伴ひ行へど人の見えぬも公憂い汝ハ跡より尋ねしと
儀引ぬと昔柳六鬼目人の妾婦を拒んだ已う見えぬと潔く見えぬものと
すく。女の云えぬるみながら小を忍びざるはの大謀を乱とせり入るのこころ
あり。忠我のこめお斯ごり。些細のこにかははるし大事を誤りもあらず。なれ
非謗とらけ多し強て伴ひ多れれと申すも今世間の賢い人知れ
旅路女子の呻吟も命の世のうへいさるる人又禍。遭あふ。己父の
公京後むす忠を忍ばははる。前のゆゑに付れり。はそれとては夫の出
せし言語細も言不及ぬと申すも思ふははる。思ふもよとあら。同く旅路を行
多し爾までんぬ害あるはし。尚厭ひ多し。云よ小太郎らち微笑女子や
似けき道理をよと云も述はる。望まはし。決其おは。旅路を懸野まう。
いぎ旅路さるりねが。徳念殿を憚れぬ汝も我も。是れは。懸野を者よ扮打ん
昔柳やてうち娘。命定ぬ爾の昔の賊の存命。道者の衣裳もいふ
これめん。せと長櫃の裡を撈へは。出せ。小を命大き。存びて。物
教止ら。主従切を全くと吉兆とこそ。いざとくと。衣
を急撫はく。懸野踏はして。支出ぬ。茲に脱結する。賊の横山が部下の賊主
由利の新發意とて。限りた。強盗。此の小巢穴を営み。旅客を行劫。小
術計る。或は地獄の形を示す。又は猛獸怪異を現し。人々。膽を
潰さ。金を失や。て金銀衣服を奪ひ。え。その。容貌。驚き。女
あま。是れ。奪ひ。或は妾とし。あ。斯思。行。人の。主命
を。又。皇天の悪。小太郎。一時。を。討。

小栗外傳卷之十三畢

